
新・浅井長政伝 ~戦国乱世に魔王を喚んだ男~

ハシリケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・浅井長政伝 ～戦国乱世に魔王を喚んだ男～

【Zコード】

N7198E

【作者名】

ハシリケンシロウ

【あらすじ】

乱世の魔王【第六天魔王】はなぜ降臨したのか？ほぼ間違い無くその取つ掛かりとなつたであろう、浅井長政の裏切りをベースに探つてみよつと思つ。

序章 【結婚】（前書き）

この作品は夏ホラー2008「百物語編」の一編です。

夏ホラー2008

百物語編

のどちらかのキーワードでサーチをかけますと、百編全てにヒットいたします。

2008は、半角です。『』注意ください。

この作品は歴史物ですが、定説とは全く違う方向に進んでいます（勿論、それなりの根拠はちゃんと有りますよ）。

例えば長政とお市の結婚は永禄十年とされていますが、本作は四年としています。

また本作では、この結婚の段階で、浅井、朝倉同盟が既に消滅しています。

この製作に臨むに至り、様々な資料を集めて（主に「コンビニやブックオフで買い込んだ書籍」、「これ一番有利得るだろ」と思つて説をチョイスした結果、このようなことになつてしましました。

史実と違つ過ぎてんじやねーか！！ と田ぐじらを立てずこの、こう考へ方もあるんだな程度に思つてくださいと幸です。

序章 【結婚】

魔王。それは、東洋で言つといろの死神に相当する存在である。西洋に生まれた魔王という存在は、死に瀕し精神力が弱つた者、あるいは、難局に直面し心がくじけてしまった者を贊とし、贊の精神や心をひたすらしゃぶり尽くすことで、死に誘う者であると言われている。

時は日本の戦国時代。この、時代自体が狂つているとしか言つようの無い凄惨な状況の中、一人の漢が魔王によつて、しゃぶり尽くされようとしていた。

【新・浅井長政伝 ～戦国乱世に魔王を喚んだ男～】

永禄四年、一組の男女を結び付ける婚姻の儀が、尾張の国にて盛

大に行われていた。北近江に本拠を置く戦国大名浅井賢政と、南尾張（実質的には隣の三河も含む）の戦国大名織田信長の妹であるお市との政略結婚である。

領地面積としては数有る戦国大名家の中に在りて、一一を争う狭さであつたが、日本で一番活発に活動している島津商人達の収益のほとんどを吸い取るシステムを確立することに成功し、経済的には有り得ないほど富んでいる織田家主催の婚姻の儀である。その豪華絢爛さは、後に尾張の国から愛知県と地名が変わつても【尾張の嫁入り】として伝説的な語り種となるほどのものだった。

この婚姻によつて両家にもたらされる恩恵は、計り知れないものがあつた。信長にとっては、義父の仇である斎藤家当主、斎藤義龍を南北から挟み撃ちに出来る絶好の状況を作り上げ、賢政にとっては、宿敵である南近江の六角家と、その同盟者である美濃の斎藤家による挟み撃ちに対し、強烈な牽制が出来たのだ。

つまり、美濃の斎藤家を撃ち滅ぼさねばならないという状況で両家の利害が完全に一致しているのである。

故に政略結婚、そして、同盟なのである。

『父上様。貴方は誠よく決断してくださつた。貴方が朝倉との縁を切つてくださつたが故に、某が義兄上と縁を持つことが出来たのでござります』

賢政は父久政に心から感謝していた。

越前の国戦国大名、朝倉家。

確かに祖父亮政の代には相当世話になつていたらしいが、父の代になつてからはなんら協力してくれない朝倉家。

六角家との合戦で援軍を要請しても、【雪が降つてゐる】【雨が降

つてゐ】とはぐらかし続ける朝倉家。

その結果、合戦に破れて臣従に近い形で六角勢力に取り込まれても詫びの一つも入れて来ない朝倉家。

そんな朝倉家に愛想を尽かした久政が同盟破棄を突き付けたからこそ、この織田家との同盟が成立したといつても過言ではないのだ。なぜなら、織田家と朝倉家は昔から越前の国の領有権を巡って争つてきた仇敵だつたからである。

『誠に父上様の御蔭でござる』

賢政は戦国一の美女と謳われるお市を横に、感涙に咽び始めた。一旦出始めると止まつてくれないのが、男の涙というものである。賢政は、静かに、だが、烈しく、しくしくとしゃくりあげ続けっていた。

「いかがなされましたかな、賢政殿」

一人の仲を取り持つこととなつた、微妙に薄い口髭、色白の細面というやや頼りない印象の、鎧甲より紋付袴のほうがよく似合いそうな典型的な優男が声をかけてきた。今回の盟主、織田弾正忠信長である。

「何を申されます、義兄上様。某共、これより義兄弟なのですぞ？」
呼び捨てで良うござりまする

満面の笑みを浮かべながら、和やかに反論した。他人行儀に接されてしまつては、いまひとつ連帯感も沸いて来ない。

「あい解つた。賢政がそう望むのであらば、この先、かように接することにいたそう。で、いかがした？」

慈しむような目で賢政を見据えた信長は、そつと人目につかないよつ手ぬぐいを差し出してくれている。

「実は某、もつと臣従に近い形の同盟を覚悟してございました。それがかよう同等の如く良き約定にて結んで頂けるなど……。感激に言葉もござりませぬ」

信長の気配りに答えるよつて賢政は、来賓達に背を向けてひつそりと涙を拭つた。

「それと兄者。某も「、【賢政】といつ不快なる名は捨てます」

【賢政】。その名は昔六角家に戦で散々に打ちのめされた際、六角家への臣従の証として強引に押し付けられた名なのである。賢政の賢は、六角家当主、六角義賢の賢だったのだ。

その時名とともに押し付けられた嫁はとっくに呑き返していたが、この屈辱的極まる名は、未だ引きずつたままだったのである。

「兄者にさえ異が無ければ、一文字拝借致しまして【長政】と名乗ります」といいます

「左様にござるか。そなたの良きに計らつが良ござ、【長政】」
信長は、友好的に賢政の肩を軽く叩いた後、彼のことを【長政】と呼んだ。それは、信長がこの名の一部を「える」ことを認めたと同時に浅井賢政から浅井長政へと、賢政の名が正式に変更されたことを意味している。

序章 【結婚】（後書き）

や、りんほつがいいのかも知れませんが、一応定説と違う点の根拠を列記してみようかと思います。

【結婚が永禄四年】

- 若干歳喰つてはいるが、お市の年齢が結婚適齢期
- お市が結婚直後にいきなり淀殿を産んでいるといつ矛盾が消える
- 十年だとすると、織田家には上洛の際に近江を素通りできるというメリットしか無く、浅井家に至つては全くメリットが無い（斎藤家は信長が既に滅ぼし、六角家も滅亡寸前）
- 長政が賢政から名を改めたのがこの年

【浅井、朝倉同盟消滅】

- 浅井方の史料に久政以降の代が朝倉家の世話をになつてゐる記述が全く無い
- 同盟相手の織田家が朝倉家の仇敵である
- 浅井家と朝倉家の政略結婚が一度も無い
- 姉川合戦や小谷城防衛戦での朝倉軍にやる炎が無さずある

以上で、いざります。

婚姻の儀をつつがなく終了し、晴れて織田の親族衆となつた浅井賢政は、このめでたき日を境に浅井長政へと改名した。

この後に待つ仕事は、この日一番の大仕事、同盟調印だ。長政には、その約定の中にどうしても入れておきたい一文があつた。

【越前に攻め込む際は、必ず報告する】

これは勿論、祖父が世話をなつたからなどといふおめでたい理由ではない。寧ろ祖父しか世話をなつていなかつて、という理由なのである。

久政の代でも同盟は継続していたにも拘わらず、戦になつても後方支援にも回つてくれないし、窮地に立たされても援軍どころか、兵糧の一つも出してくれやしない。

一度や二度ならまだ許せるが、六角家と戦つこと五回、五回戦こそ長政の大活躍により、圧勝を収めることが出来たものの、他の四回は大なり小なり負けてしまつてゐる。

その四回全てに、朝倉家は何もしてくれなかつたのだ。明らかに職務怠慢だ。浅井家としては、それが非常に許し難い。

故にこの際、織田家と共同戦線を張つて朝倉を叩き潰してやるつというのが、この約定の真の狙いなのである。

もはや朝倉家は浅井家にとつても、仇敵でしかなかつたのだ。
「某、かよつにやる氣の無い守護家を存じ上げませぬ。紛う事無く天下の妨げ故、共に朝倉を討ち滅ぼしましょつぞ！」

甲斐の武田軍、三河の徳川軍に次、天下三であるといわれている浅井軍に、天下一富んでいる織田家からの経済援助が期待できるの

ならば、それはもはや、無敵の組み合せである。

越前の京化に明け暮れ、自領に引きこもつたまま周りの情勢に田も向けやしない朝倉義景など、一欠けらも残さずすり潰すことができるだらう。

ある意味、織田家に丸投げしても良いような気はするが、どうしても自分主体で奴らと決着を着けたいという頑なな気持ちが長政には有つた。

幾ら相手が信長とはいえ、これだけは絶対に譲れない。

「どうしても某の手で、あの裏切り者を葬りたい所存！」

調印会場である清洲城の、織田家の裕福さを示しているかのような格調高い机を渾身の力で殴り付け、小刻みに震えながら朝倉家に対して溜まつた鬱憤を力説する。

「落ち着け長政。そなたが我が城を破壊したとあらば、例え義弟といえど修繕費を全額請求するぞ？」

見るからに高そうな机である。いくらただの備品であるとはいえ、手痛い出費を被るのは間違い無いだらう。六角家からの再独立を果たしたばかりの長政にとっては、余計な出費に当てる金の余裕など全く無い。

「以降……、気を付けまする……」

生来生真面目な男なのか、長政は馬鹿丁寧に頭を下げた。

「ハハハハッ、誠にくそ真面目な男よのう。それがそなたの良き所でもあるが、一度恥も外聞もかなぐり捨てて傾いてみるが良からう。さすれば目に見えぬ物が見えてくるようにもなるだぞ」

信長は、昔の己の如く傾奇者（悪戯者）となることを長政に推奨してきた。彼の事は、心から信頼している。だが、その生真面目さが故に、信長の考え方全く理解を示さない可能性が有つたのだ。だからこそ、どうしても自分と同じ士俵に上がつて来てもらいたかつたのである。

そして、信長は続けた。

「これより結ぶのは攻守同盟にござれる。言われるまでも無く出陣の

際は、必要とあらばそなたに作戦を申し付けるぞ。そなたも我が力
が必要とあらば、遠慮無くわしに申し付けるが良い」

「いひして、後々禍根を残すこととなる【越前に攻め込む際は必ず
報告すること】といつ一文が、約定の中に加わることになったのだ。

武章 【疑惑】（前書き）

本作の稻葉山城攻めは、木下藤吉郎が十日（ちなみにこの年は、八月と九月の間に【閏八月】）というのがあって、厳密な築城期間は四十日あつたらしいですよ（＾＾；）で作り上げた墨俣砦から稻葉山城を直撃したという甫庵信長記がベースの定説ではなく、斎藤家から攻め落とした墨俣砦はひとつと引き抜って、美濃の東側からジワジワと稻葉山城に迫つたといつ、信長公記の説を採用しております。

武章 【疑惑】

あれから六年経つ。美濃は信長の手により、その東半分を攻め落とされていた。

浅井、織田同盟が結ばれてからというもの、織田家の所領は尾張の南半分から、尾張全域と美濃の東半分へと急速に拡がっている。もはや美濃国主である斎藤家は風前の燈し火といった情勢だ。

そんな折、長政の元に斥候からの注進が入った。

「尾張守殿、調略により美濃三人衆を寝返らせた模様！」

《一》

さすがにこれは予想だにしていなかつた事態である。美濃三人衆。それは、斎藤利政（道三）の代からずっと仕えていた普代の忠臣三人組であり、もはや斎藤家の象徴のよつた存在であった。

そんな連中を味方に引き入れた。

それは則ち、後は義龍の跡を継いで当主となつた、龍興の本拠である稻葉山城を取り囲むのみで斎藤家を降伏させるための準備が整つたといふことなのである。

「何たる事……。何故兄者のみで斎藤を落としてしまわれる……」

この報告により、長政の脳裏に沸々と沸き上がる疑問。そして、これから浅井家の在り方を見直せという、内なる「」からの警鐘。

【共同戦線を張つて、共に斎藤龍興を討つための同盟ではないの

か！？】

一度疑い出すとキリが無いのが人間である。長政の思考回路は、瞬く間に負の思考に充ち溢れてしまった。

『確認を急がねば……』

これまでいろいろと個人的に世話になつてきた、信長のこつもの豪快な笑顔を必死になつて思い浮かべながら、その妹である市が控える奥の間へと忙しなく移動していった。

「市！ 【尾張守殿】からこの同盟について何か聞いてはおらぬか
市をつかまえ、同盟の意味について問い合わせす。
「どうしたのです、お前様？ いつも兄者と慕つていた兄上様を急
に尾張守殿だなんて」

「かようなことはどうでも良いのじゃ！」

己も気付かぬうちに、長政は市の胸倉を掴み上げていた。

「何をなさるのです！ お離しくださいませ！」

市の一喝により、漸く己を取り戻した長政は、素早く手を離し深々と頭を下げ、その体勢を維持したまま、彼女へと濃情勢を報告する。

「成る程……。確かに疑わしき行動にござりますね。ですが、誰にも報告せずに一人で決めて、勝手に決行なさるのは兄上様の軍事行動の典型にござります故、あまりお気になさらないほうが宜しいかと存じます」

市から返ってきた答えはこのような物だった。気にするなど言われても、そとは行かないのが現状である。

【信長は浅井家の力を頼りにしていない】

その可能性を否定できない限り、この同盟が持つ眞の意味に辿り着けなければ、浅井家に明日は無いのだ。

美濃三人衆を調略した信長。その報告を受けた長政は、稻葉山城落城まで一週間も必要としないだろうと予想した。

城を取り囲む軍勢の中に、自軍の象徴であるといえる三人の姿を見る。斎藤軍にとつてこれほどやる気が失せる光景も、まずないだろう。

先ずは三人衆を慕う者が、続々降伏。その光景を目の当たりにし、勝ち目が無いと判断した家臣連中が続々降伏。最後に、人足も成す術も何も無くなつた龍興の無条件降伏により、稻葉山城落城。この状況に辿り着くまでに、一週間どころか六日もかかる筈だ。なにせ後は、取り囲むだけなのである。

言つまでもなく、この流れの中に長政の名前が加わる可能性は、極めて薄い。

だからこそわざわざ奥の間にまで行つて、信長の身内である市に確認をとつたのだ。

その結果返ってきた答えが【気にするな】だつた。この同盟の在り方一つで浅井家は滅亡してしまつ可能性まであるのだ。そんな一言で済ませて良いほど軽い問題ではないのだとこいつことは、市にも解つてゐる筈である。

解つていらないなら、【疑わしい】などといつ言葉は万に一つも出でこない筈なのだから。

長政は、この結論に行き当たると同時に市へと正氣の沙汰とは思えないような言葉を放つた。

「場合によつてはそなたを叩き返すか、斬るやも知れん。その覚悟だけはしておいて欲しい」

なおも頭を深々と下げ、詫びの姿勢を保つたまま涙ながらに語る長政に対し、市は哀れみに近い目を向けて、

「お前様、他家に嫁に出された時点から、そのような覚悟はとつく

に出来ております。お前様に介錯してもらひるなり、本望にござります」

と、慈しむように頭を下げ続ける長政の手を取つて、それを両手でそつと包み込んだ。

市は、長政の涙を見た時点で信長の妹としてではなく、浅井家の嫁というよりは寧ろ長政の妻として動くことに決める。始めはありきたりな政略結婚だった。この一人のように、対等な立場での同盟のための結婚などはまだマシなほうで、場合によつては臣従の際に人質として、主家の家臣、或は息子に嫁に出す事すら有り得た時代なのである。

それから比べれば、自分の意志とは無関係な結婚であつても、文句を言うのは贅沢というものだろう。だが、市の場合は、そんなありきたりな政略結婚ではなかつたのだ。

これほど結婚觀の狂つてゐる時代の中に在つて大恋愛の末に奇跡的な恋愛結婚を果たしたおねねが女として、否、人として、非常に羨ましかつたりもしたが、自分にもその瞬間が訪れたのだ。

まさに、一目惚れだつた。長政もまた、一目で痛く氣に入つてくれたらしく、始めは氣乗りがしなかつただの政略結婚の筈が、瞬く間にそれの名を借りた恋愛結婚へと豹変したのである。

自分が惚れた相手だからこそ、心から好きな相手だからこそ、わがまま三昧で勝手な事ばかりする信長よりも、長政の味方で居たかつたのだった。

「わたしは女です。長政様、そんなわたしを軍師として、召し抱えて下さいますか？」

あの信長をして、

「市が男であつたなら、百万の軍勢を縦横無尽に操る大軍師となれたものを……」

と常々言わしめたといつ素質娘が今、狂った時代への挑戦を始める。

この状況で、斥候より信長が稲葉山城の包囲を開始したとの情報が飛び込んでくる。

道三の代には【難攻不落神話】さえ生まれていた稲葉山城の、龍興の代での一度目の落城が、いよいよ間近に迫ってきたのだ。

情報をもたらした斥候が居なくなつたのを見計らつて、市は早速仕事を始める。

「南蛮の地には、魔王というものが居ると、イエズス会の方々が申しております。今度の織田の行為は、その魔王の行いに匹敵するものが有ります」

魔王とは、魂を喰らう者。まずは精神に取り憑き、それをしゃぶり尽くすことで、魂を刈るのだといつ。

今回の信長の行いは、紛れも無くこの取り憑きの部分に相当するものだ。

「南蛮で最も著名な魔王は【サタン】と申すのだそうです」

「さたん？ 何やらよく解らぬ名じゃな……？」

「左様にございましょう。それ故信長は天下に透り易いよう、サタンに代わる名を「えました」

「なんと？」

「【第六天魔王】」

市の話によると、このサタン改め第六天魔王なるものは、天界に住まう中級天使でありながら、自らの意志で魔界へと亡命、そこにおいて己の実力を遺憾無く發揮し、遂には魔界の王として君臨する

こととなつたのだという。

今、信長は日の出の勢い。

父信秀から家督を継いだ時点では、守護代家の家老という微妙な立場であつたにも拘わらず、今では、尾張全域、美濃半国を領有し、更に隣国三河の徳川家康をうまく抱き込み、美濃の残り半分を制圧するのも時間の問題と來てゐる。

長政は思う。

『第六天魔王と同じだ』
と。

「この狂つた時代に……、魔王が降臨したというのか……」
いよいよ彼は、信長を魔王だと思い始めてしまつたのである。

それから口を置かずして、斥候より『稻葉山城落城』の報が入る。その顛末は、果たして長政が予想した通りのものとなつた。
それから程無くして、織田家は本拠地を尾張の清洲城から落とし、たばかりの稻葉山城へと移し、中国は春秋戦国時代の古事に習い、城の名を『岐阜城』へと改名する。

稻葉山城から岐阜城へと名前を変えた御利益なのだろうか、その途端に織田家に太陽が昇り始めた。

三好三人衆や松永久秀に、本来征夷大將軍となる資格を持つながら、『扱いにくい』との理由から京を追われてしまつた公方家嫡男、足利義昭に義昭の家臣、明智光秀らの仲介によつて接触、その

まま、居城である岐阜城にて匿うことが決まったのだ。

つまり、中国は三国時代序盤の曹操と同じような状況が、己の手を煩わす事なく、勝手に転がり込んできたのである。

己の報告に長政は、心底悩んだ。織田家の親族衆として喜ぶべきなのか、一大名として憂慮すべきなのか。明らかにせつかちな信長のことだ。おそらくは上洛して室町幕府将軍を奉じる立場となるのに、五年とかからないだろう。

「市、おぬしはどう見る、今後の尾張守殿の動き」

自分では判断できなかつた長政は、秘密裏に軍師として取り立てた市に伺を立ててみる。

「紛れも無く上洛するでしょうな」

「それは解る」

信長が自力で美濃を手中に納めたとなると、残る同盟の意味は、上洛時の近江の素通りしか無いのである。

「信長はあの性格故に、おそらく北近江から迂回する安全策は採らず、最短距離である東海道を直進する道筋であると思われます」

「それも……、まあ、何となく解る」

おそらくはそつなるだろ。とすればそこにはだかる敵は、南近江の六角家、近畿一円の三好三人衆と松永。こんなところぐらいしか居ない。だが、信長が従える兵は、天下最弱との悪名が高い尾張兵である。おそらくは誰がしか同盟者に援軍を頼むことだろ。成程な。我が家に援軍要請があらば、まだ脈が有るということか」「それは有りませぬ。わたしが信長であつたなら、お前様には絶対に要請致しませぬ。といつより、できませぬ」

「？」

長政は、言葉の真意を計り兼ねた。どうしても浅井家に援軍を頼めない理由とは何なのだろう。

「信長は六角家を直撃します。お前様が城を空けると、奴らが総力を決してこの小谷城を目標に北上してくるからにござります」

『そういうことか』

長政は納得した。確かに、南近江勢力の逃げ道を塞ぎたいのなら、長政には直ぐ上からガツツリと睨みを利かせてもらわねばなし、もし自分が六角義堅であるならば、長政が織田上洛軍に加わるの報が入った時点で、小谷城が空き次第、攻略隊を派遣するだろう。これが解れば、斎藤攻めに浅井家を動員しなかつた理由も全く同じ事なのだとすることが、痛いほど良く解る。

こうして、一時的にではあるが、長政の信長に対する不安は解消されたのだ。

四章 【不満】

信長の上洛は、義昭を匿つてから一年後、永禄十一年に行われる。市の立てた予想通り、徳川家康の援軍を含む四万人の大軍を以つて東海道を直進。

浅井家の宿敵でもあつた六角家を含む、街道沿いの勢力をいともたやすく蹴つ散らかしながら、たつたの二十日で美濃、山城間を走破してしまつた。

この上洛によつて、京を追われた公方家嫡男義昭は無事に征夷大將軍となり、信長は予想した通りに後見人といつ立場に収まつた。

勝ち戦の後に必ず行われるのが、論功行賞だ。言わば祝勝会のようなものであり、褒美の授与などがこの席にて行われる。

この時の信長の所領分配が頭から離れない。長政が長年欲してきた南近江を、そのまま六角家から降伏してきた者に投げてしまつたのだ。

確かに、直接参戦したわけではない。直接参戦したわけではないが、間接的な貢献度はかなり高い筈である。にも拘わらず、浅井家ではなく、元六角家。

『どういうつもりじゃ、魔王め……』

今度は疑いではなく、怨念を持つてしまつた。

「市い……、あの魔王めは、一体何を企んでおるのだあ……」

そう咳きながら迫つてくる長政の目は、もはや常人の目ではなかった。昔から領有を願つて止まなかつた南近江。自分の睨みによつてその領主である六角義賢の北上を封じていたのだ。

だからこそ信長はあつさりと蹴散らす事が出来たのだし、義賢にとどめを刺し損ねたのはあくまでも上洛組の手抜かりであつて、長政には何の責任も無いのである。

にも拘わらず、南近江は六角家からの降伏武将。長政が乱心気味になつてしまふのも無理はない。

なまじその長政の無念さが理解できるだけに、市はこゝで覚悟を決めた。

「どうなさいます、お前様。わたしの首を信長に叩き返しますか？」前に胸倉を掴み上げられたときは、一喝しただけで冷静さを取り戻してくれたが、おそらく今回はそうはいかない。最低でも、打たれる程度の覚悟が必要な気配だ。

「……、……、……」

非情な程に重い沈黙が、小谷城奥の間を押し包む。相変わらず狂つた眼差しを向ける長政が、防御体勢を取るのも難しいほどの、非常に素早く、かつ、効率的な動作で市の左頬を張つた。取つて返す手の甲で、右頬をも張り飛ばしてしまつ。

堪らず市は、畳へと張り倒されてしまった。顔をしかめて頭を振る市の額を目掛け、長政は更に右足を繰り出す。

この足が目標にきつちりと命中したのを確認した長政は、市に背を向け、奥の間を去つて行つた。

市には、去り際に長政が吐き捨てていつた言葉を打ち消すことが出来なかつた。

「あの魔王めに面差しが似過ぎておるのだ……」

という言葉が持つ意味、これから先に待つ己の悲運をどうしても打ち消すことが出来なかつたのである。

第十五代室町幕府將軍、足利義昭。彼は十三代將軍、義輝が襲撃を受けた時、奈良にいた。その時彼がいた奈良興福寺が、かなり強力な武装兵力を持つていたため、松長らが手を出せずにいたのだ。実際に義輝暗殺後すぐに、出家していた三男は、京にいたため、殺されてしまっている。

一步でもこの興福寺を出ようものなら、直ぐにでも追つ手により討ち果たされてしまう状況に陥ってしまっていたのである。

そんな状況で敢えて自らの命の危険を顧みず上京したのは、言うまでもなく三好三人衆らの専横を憂えてのことであり、それ以上に荒れ果てた国を自らの号令により立て直そうとしたからである。

信長の護衛のもと無事に上洛を果たした義昭は、直ぐさま將軍として戦の仲裁に乗り出している。

それからたつたの一ヶ月だ。たつたの一ヶ月で信長は義昭の將軍としての権限を、限定し始めてしまったのである。それもいきなり、

【奉行衆の決定に口を出すな】

【將軍への取り次ぎは何事も全て申次衆を通すこと】

等のかなり強烈な制限だ。さすがに始めは御父上と信長を慕つていた義昭だったが、これを機に仲が瞬く間に冷え切つてしまつた事は言つまでもない。

信長への不信感と怨みが爆発寸前の長政の下へと將軍からのそれが届いたのは、何かの宿命なのだろうか。

將軍からの【御教書】。

御教書とは、將軍からの命令書。
そこにはこう書かれてあった。

【武田、朝倉、六角と手を結びて、天下の妨げ信長を討つべし】

小谷城本丸。ここにおいて、この御教書に対する評定が行われた。現場に集まつた家臣団を見ても、総大将である長政を見ても、ものはや評定など行つまでもなく方針は決まつているぞといふ空気が満々に漂つている。

問題なのは、宿敵六角家や、手切れを申し渡したばかりの朝倉家が乗つてくるかどうかなのである。

「機会は今しかじぞらん。魔王めに氣取られる事なく、秘密裏に包

囲を完成させねばならぬ」
信長への怨みをありありと剥き出したその顔は、まるで長政のまづが魔王なのでは無いかと思えてしまつ程に狂おしい。

市は、奥の間にて小刻みに震えていた。義昭將軍から御教書が届いたとの報告は、彼女にも入っている。ここで問題となるのは、今後の身の振り方だ。

一旦浅井家側に回ることを心に決めた市ではあつたが、あの言葉がどうしても頭から離れて行かないものである。

【魔王めに面差しが似過ぎてあるのだ……】

あれから特に暴力などは無いものの、あの時の日つきが、顔つきが、醸し出す雰囲気が、自分がこの空間において、人としての尊厳を保つていられるのか甚だ疑問なものとしてしまっていた。

愛している。間違いなく、長政を愛しているのだ。その気持ちは今でも変わらない。出来れば信長との仲を修復したいのだが、おそらくは無理な相談だらう。市は、人知れず頭を抱え、激しく振り乱した。

六章 【憑依】

信長所領の周辺諸国は、わりかし迅速に行動を起こしている。

甲斐の武田晴信（信玄）は上洛軍を結成して着々と準備を始め、六角義賢は長政と結託して長政が造反すると同時に南近江に戻つてくるといつ密約を取り交わしていた。

御教書を受け取つた大名達の中にあつて、唯一何の動きも示さなかつたのは、朝倉義景のみである。

全てが秘密裏に行われた。相手はあの織田信長だ。見つかってしまえば一巻の終わり。おそらくは滅び去るまで攻め立てつづけるだろ。づ。

だからこそ、全てを表に出す事なく表面上では緊張した平穀を保つていた筈なのである。

にも拘わらず、真つ先に目に見える形で行動を起こしたのは、信長だった。

御教書の受取人である長政達の行動は秘密裏に行われていたが、発行人である義昭の御教書乱発が信長の疑いを招いてしまつたのだ。

信長が義昭をお飾り将軍に仕立て上げてから一年後の元亀元年、遂に、この男はやつてしまつたのである。

【第一条 諸国へ御教書を出して何かを仰せになるときは、信長にその内容を話した上で、添え状を付けてもらつ事】

【第一条 これまで将軍が仰せになつた命は、全て無効とする】

【第三条 家臣に恩賞を出したくとも所領が足りない場合は、信長の所領から将軍の命を以つて与えること】

【第四条 天下の事は全て信長に任せたのだから、誰に対しても信

長は、將軍の意向に拘わらず自由に処罰することができる】

【第五条 天下の平和のため、將軍も朝廷に奉公しなければならぬ】

いわゆる、五ヶ条の条書。特に重要な項目は一と四であり、それ以外は申し訳程度の意味合いである。

一は將軍がこのところ方々に御教書を乱発していることが、信長に簡抜けであったことを示しているものだし、当然四の【誰】の中には、義昭も含まれているのである。

それより何より、この四によつて義昭がお飾り將軍でしかないのだということを明文化しているのだ。

そして……、義昭はそれを承認してしまったのである。

五ヶ条の条書を義昭が承認したことによつて、義昭からの命令が全て無効となつた。その報を受けた長政は、例の御教書をどうするかの選択に迫られる事となる。

とはいゝ、これは元々方針として決まつていたことであるため、浅井家に方向を転換するつもりはない。

「ええい、朝倉め何をもたもたしておるのだ……。あやつが攻め込むのが謀反の狼煙であろうが……、……、……」

それが当初交わした密約による、朝倉義景の役目。

朝倉軍による美濃侵攻を契機に、浅井、六角連合軍が尾張を急襲。指令系統を壊滅させた後に天下最強の武田軍が徳川領と尾張、美濃以外の織田領を一気に踏み碎きながら上洛という作戦、つまり、信玄上洛作戦を、御教書を受け取つた四家で立てていたのだ。

なのに、朝倉義景が動かず、しまいには信長が手を打つてしまつたのである。信長の感の良さ、全く以つて侮り難い。

「朝倉あ……。やはりあんな奴に任せるのは失策であつたかあああ……」

朝倉の腰の重さは解つていた。これまで何度も被害に遭つている浅井家なのである。密約を交わす前からこうなるだろう事は予測していたのだ。予測していたにも拘わらず、この様である。

「どうしてくれる、魔王めが動いてしまうではないかあ……」

長政は震えている。小谷城床の間にて、膝を抱えて小刻みに震えている。

涙を流し、垂涎しながら、力任せに枕を何度も殴り付けた。どうしても震えが止まらない。どんなに暴力的に、そして高圧的に振る舞つても、第六天魔王に対する恐怖の念が、長政の頭から離れて行かないのだ。

こうして乱世の魔王第六天魔王は、織田信長という媒介を経て浅井長政へと取り憑いてしまつたのである。

七章 【急襲】

まさかこのよつた形で信長と取り交わした約定が役に立つとは、長政自身思ひもしなかつたる。

【越前に攻め込む際は必ず報告すること】

本来は、自分達浅井家主導の下、朝倉義景を討ち果たすための約定だったのである。この約定が今、浅井、朝倉、六角、武田連合軍の命綱となつたのだ。

信長が約定通りに浅井家に報告を入れてきたならば、即座に義景に密使を遣わし、美濃攻撃の踏ん切りを付けさせることが出来るのである。

ところがここでも、魔王信長の感が冴え渡る。

出陣の際幕府へと申し立ててきた進軍目標は若狭だった。

「若狭の武藤を成敗してまいる」

という申告だったのである。

ところが織田軍は目標であつた筈の若狭を素通りして、その先に有る越前、つまり朝倉義景の領国へと攻撃を開始してしまつたのだ。

信長の越前急襲の報を受けた長政は、心の底から震え上がった。
『魔王めは千里眼でも持つてあるのか？』

見抜いていたのだ。信長は完全に見抜いていたのである。実際に少し考えればすぐ解ることだった。信長が匿う前まで義昭を匿っていたのは、朝倉義景なのである。

信長が義昭の敵に回った以上、義昭が最も頼りにできる大名は義景だということになるのだから。

それに加えて作戦指示のための御教書乱発。そのうちの何通かが越前に宛てられたものだろう事は、たやすく想像できるのである。だが、長政はそうとは思わなかつた。既に信長に対して畏怖の念を持つていた彼にとつては、もはや千里眼としか思えなかつたのだ。緊張により、廁が近くなる。越前急襲の報よりまだ一時間と経過していない。にも拘わらず、三度目の廁だ。しまいには、下腹部に鈍い違和感を感じるようになってしまった。

長政は、排尿を終えた後、意見を伺つため市が控える奥の間へと向かつた。

市は今、長政を前にしている。信長の越前急襲を前に、浅井家はどう動くべきなのかとの伺を立ててきたのである。

基本的に信長と同じ思考の持ち主である彼女には、信長が浅井家を当てにしていない訳ではないこと、いや、寧ろ一大名家として礼を尽くした結果、こうなっているのだといつこと

が痛い程よく解っていたのだ。

どうしても止めたい。この無益な戦いをどうしても止めたい。止めなければ。

「お前様、こゝにまじうしても朝倉方に御加勢なさりますか？」
こんな事を言つては、また殴られるかも知れない。その恐怖が無い訳ではなかつたが、どうしても言わずにはいられなかつた。長政の判断は明らかに間違つてゐるのだ。

「済まぬ。辛い戦になるだろうが、堪えてほしい」
長政は深々と頭を下げてゐる。いつもの長政だ。

『まだ冷静さが残つてゐる』

そう見た市は、これまでの信長の行いが全て同盟に則つたもので有ることを一気に畳み掛けた。

「浅井、織田間の同盟はあくまでも攻守同盟です。お前様は信長に仕出した訳でも臣従した訳でもありません」

攻守同盟。それは、侵攻する際は援軍を要請することができ、侵略された際は、援軍を徴発することができるという同盟。今回はそれに【朝倉義景へのトドメは長政に任せる】との特殊な条文が混じつているだけなのだ。

まだ一乗谷城を包囲した訳でもないのだから、この越前急襲も約定違反には当たらないのである。

「いかに親族といえど、家臣ではない者に所領を分配する訳にもまといませぬ。それ故、元々かの地を治めていた六角家ゆかりの者に一時的に任せたのだということを、何卒ご理解下さいまし

市は額を畳にこすりつけて詫びながら、信長の事情を説明する。その姿勢を保つたままの市は、長政が立ち上がったのを気配から察した。その刹那である。

後頭部にひどい圧迫感を感じ取り、それと同時に顔全体を畳に叩き付けられたのは。

床に這いつくばつたまま、市は長政の声を聞いた。

「ふん！ やはり魔王の縁者など頼りにした某が間抜けであつたわ！」

気が狂いそうだった。どうしても解つてもらえない。信長の天下が来た時に、近江は浅井家の物になるというのに……。

八章 【謀反】

その日長政は床でうなされていた。越前を攻めた信長は、その日のうちに手筒山城落城。そして、金ヶ崎城も落城寸前との報告が入ってきたのである。

朝倉義景は何としても守り抜かねばならない。もし義景が捕まってしまつたらその口から、信長包囲網の存在が明るみに出てしまう可能性があるので。

長政は寝付けない床で、この夜一十回目の寝返りをうつた。どうしても寝付けない。

どんなに寝付けなくともいつかは眠りに落ちるのが、人間という生命体である。彼の寝返りが三十回目を数えた時、長政は既に、眠りに落ちていた。

信長から書状と中くらいの箱が届いた。朝倉義景が捕まり、処刑されてからすぐにきた贈り物。詫び状なのだろうか、それとも、報告書なのだろうか。

書状にはこう書かれてあるのみ。

【無念】

立場によつてどうとでも取れる一言。信長は一体何が無念だと言いたいのか。

信長の無念、それはこの箱を開けた時、形となつて現れるのだろう。

箱に手をかける。いよいよ開かれる禁断の箱。

箱が開かれた時にまず感じ取ったのは臭いだ。錆び腐った鉄の臭い、そして、タンパク質の腐った臭い。

戦人である長政には、それが何なのか、直ぐに解った。

『人だ』

臭いが目に染みるのを堪えながら見つめた箱の中身は、

朝倉義景。

それを見た瞬間まるでそれ待っていたが如く動き出した男がいる。第六天魔王、織田信長。

斥候から、織田軍に囮まれたとの報が入ったのである。城に火の手が上がったのは、それから直ぐの事だった。

押し寄せる織田軍。瞬く間に長政が追い詰められてしまう。襖が蹴破られ、兵が押し寄せてくる。

その前にも後にも人はない。押し寄せてきた兵の名は、第六天魔王、織田信長。

背中に黒い羽を生やし、妖しく狂おし気に目を吊り上げ、ギラギラと赤く瞳を輝かせる、魔王信長。

乱世の魔王、第六天魔王を前に、長政は身構えた脇差しで、震えながら切り付ける。

怯えながらの攻撃ほど隙だらけな攻撃はない。案の定いともたやすくかわした信長は、

「無念じや……」

と呟きながら、手にしていた刀を長政に打ち下ろす。長政は断末魔の叫びをあげた途端に意識を飛ばした。

越前、金ヶ崎城落城の報が届いたのと長政が悪夢から醒めたのはほぼ同時である。

『ここに食い止めなければ……。やつとの夢と同じ事になってしまつや……』

まだ夢の余韻が残っていた長政は、遂に、謀反へと踏み切ったのだ。義景の口から包囲網の存在が明るみに出ないうちに。

金ヶ崎城を攻略し、更に奥へと信長は進攻している様だ。これら嶺北を攻める模様との報を受けた長政は、寝癖を直す暇も惜しんで戦準備を進めていく。

信長はいつも気付くのか。始めから隠し通せるとは思っていない。

信長が進軍を中止して撤退し始めたとの報が入ったのは出撃の直前だ。長政は正直、

『勝てる戦じや！』

そう思っていた。信長に突撃するための準備は整っているのである。そのうえで、信長はまさかの謀反に泡を喰つての撤収だ。この奇襲に近い突撃をかわせる力など、持つてはいないだろう。

ところが、どういう訳か、信長を捉えることは出来なかつたのだ。さすがは第六天魔王。撤退の殿（最後方で軍の安全を確保する隊・しんがり）を任せた木下藤吉郎に一際ゆつたりと引き揚げさせ、自分はとつとと京へと逃げてしまつたのだ。

越前、山城間（石川、厳密には福井北端辺り、京都間）をたつたの一日で駆け抜けていった。この時信長に付いて行けた者は、僅か十人ばかりしか居なかつたという。

この信長敗戦に勢いを得た將軍義昭は、畿内一円、相模の北條氏康、そして石山本願寺にまで働き掛け、信長包囲網を天下規模にまで拡げてしまった。更に、忠臣である明智光秀、細川藤孝の両名を敢えて信長へと寝返らせたのだ。いわゆる【埋伏の毒】。こうして信長は外から内から取り囲まれる形となってしまったのである。

長政は、この状況を作り上げてくれた義昭に心から感謝した。いくら魔王といえど、さすがにこの状況では暫くは引き籠つてゐるしか無いだろう。その間に軍備を立て直し、六角義賢や明智光秀らと連携して討ち滅ぼすことも出来るのだ。

一体どうこうからくりなのだろうか。たつたの一ヶ月である。ほぼ壊滅に近い状態でよつやっと岐阜城へと逃げ帰った筈の信長が、たつたの一ヶ月で軍を完全に立て直し、長政の治める北近江へと攻

めてきたのだ。

それは偏に信長が兵農分離による常備軍を持っていたが故なのだ
が、長政には、魔術か何かにしか見えなかつたのである。

『尾張兵まで魔と化したとでも云うのか……』

第六天魔王率いる魔界の軍勢が、大挙して自領に押し寄せる。
得体の知れないものに対する恐怖が、ジワジワと長政を蝕んでゆく。

信長の魔術的出撃に臆した国境付近を治める堀秀村が、全く何もせず無条件降伏。この段階で、織田軍は小谷城に直撃できる状況を作ってしまった。続々と入つてくる不利な情報。

信長の出撃から僅か一日。抵抗するための術がもはや小谷城籠城しかない長政は、本日十三度目の廁へ立つた。

己が放つ尿の状態が見えてしまうのが男の痛いところ。本日十三度目の尿は、黄透明ではなく真つ赤に濁つていた。

信長が横山城を取り囲む。それに徳川家康の援軍六千人が加わり、織田軍の兵力が爆発的に跳ね上がる。

気が狂いそうだった。刻一刻と不利になつていく状況。これが魔王を敵に回した報いなのだろうか。

弱気になりだした時にその報告は入つてきたのだ。

【朝倉義景が援軍八千人を率いて出撃】

正直、要らん事をとしか思えなかつた。今まで自領に引き籠つたまま、まともに戦つたことも無い越前兵である。魔界の軍勢相手では、屁のつぱりにもなりやしないのだ。

それどころか、散々に打ち負かされた結果、魔界の軍勢を更に勢い付けてしまう事にも成り兼ねない。

『冗談ではない!』

長政は慌てて出撃、この援軍と合流した。こうして後に言つ、姉川合戦が始まるのだ。

姉川を挟んで北側に浅井、朝倉連合軍が、南側に織田、徳川連合軍が陣取る形で合戦が始まる。

長政は、この戦は時間との戦いであると判断した。とにかく、速やかに信長を討ち果たさなければならぬ。そう、朝倉軍が壊滅する前に。開戦前から長政は、朝倉軍の壊滅を前提に作戦を立てているのだ。

布陣を終えた後、最初に動いたのは言つまでもなく浅井軍だ。浅井軍の突撃隊長である磯野貞昌の猛突撃が、木下藤吉郎、柴田勝家といった名だたる武将を蹴つ散らかして、信長旗本へと迫つたのだ。

一方、援軍同士の戦いとなつた朝倉、徳川戦は、長政の予測通り、朝倉軍が押されていた。徳川軍もまた、浅井軍に負けないほど朝倉軍に切り込んでいる。

この勝負、劣勢側の大将の根性勝負の感が強くなってきた。そうなると、浅井、朝倉連合のほうが断然不利といえるだろつ。

直ぐそこに魔王の姿を確認できるのだ。いつぞやの悪夢の如く不適に微笑む魔王。あの頭を胴体から切り離せば戦が終わり、長政は魔王から解き放たれることが出来るのだ。

長政は必死だ。それはそれは必死だ。義景が敗走すれば、天下二

の徳川軍が横から押し寄せてくる事は目に見えている。

それまでに魔王を粉碎しなければ。長政は必死に刀を振る。近付

けない。全くこれ以上近付けない。

魔王は結界でも展開しているのだろうか。まるで長政が居る場所から先が異次元空間であるかのようにそこから先に進めないのだ。魔王は直ぐそこに居るのに……。

結局魔王を切り倒すより先に朝倉軍が壊滅、家康から側面を突かれた浅井軍は、壊滅してしまった。

「おのれ朝倉めえ！」

負け犬の遠吠えに近い捨て台詞を残し、長政は撤退していった。

姉川で負けた後、長政は小谷城籠城を余儀なくされた。

籠城。それは、基本的に援軍を待つための戦法だ。天下で勝つための籠城が可能な者は、越後春日山城の上杉輝虎（謙信）か、相模小田原城の北條氏康ぐらいしか居ないだろう。

長政の小谷城もまた難攻不落であるとの評判を得ていたが、元々領地が狭く、生産力が低い浅井家は、結局籠城戦となると長くは持たないのである。

ここで、長政に致命的な一報。突撃隊長磯野貞昌、寝返り。

『終わった……』

いよいよ魔界の軍勢による包囲が始まる。長政も必死に同盟国へと援軍を要請している。だが、それに答えてくれた者は、悲しいかな朝倉義景のみであった。

それだけに、武田晴信（信玄）病没は痛い。もし信玄上洛軍が健在であつたなら……。

もはや頼みの綱は、朝倉義景のみである。

震えが止まらない。あの魔王が、日に日に迫つてくる。だが、長政自身は総大将として本丸に引き籠つてゐるしかないのだ。廁と居間をしきりに往復。姉川合戦より後、黄色い尿など出したためしがない。

朝倉の援軍は、得意の【雪が降っている】との理由により、全く出でくる気が無いらしい。四月末に信濃で凍死者が出て、六月始めに甲斐で降った雹が五日間溶けなかつたという、異常気象の真っ只中である。雪で出撃できないというのも解らなくはないが、盟友が滅亡寸前である事を考えれば、余りに怠慢が過ぎる。

その間にも、長政のもとには、悪い知らせが次々と飛び込んできた。

勝ち田の全くない、滅亡するのを座して待つための籠城。ついに、一の廓陥落の報が入つてしまつた。長政は、脇差しで畳を一突きにした後、たつた一言

「左様か……」

と答えていた。

涙が止まらない。何故こんな事になつてしまつたのだろう。

うまくいっていた筈の浅井、織田同盟。全ては市の言つていた通りであり、本来であれば、今現在でもこの同盟はうまく行つてている筈なのである。

何度も何度も畳敷きの床を殴り付ける。今長政に残されているもの、織田との同盟が長政にもたらしたものはもう、信長に対する恐怖しかない。市には何度も暴力を振るつてしまつた。もう、とつくに心は離れているだろう。

一の廓陥落の報。後はもう、この本丸だけ。この状況で【朝倉義景、二万人の援軍を率いて出撃】の報が入るが、そんなものは始めから当てにしていない。

案の定直ぐに【朝倉軍敗走】の報が入る。

『終わった……』

諦めの境地に達した長政は、自然と奥の間へ向かっていた。

「逃げる、市。小谷はもつ落ちる」

長政は市に逃げるよう勧める。奥の間にまできな臭い臭いが漂ってきた。織田軍が城に火を放つたらしい。今回は、奥の間に娘達も集まっている。

長政は、落涙しながら市を張り倒した。

「逃げろと申しておるのが解らぬか！」

喚きながら長政が倒れている市を何度も踏み付ける。

このままでは城が焼け落ちるのも時間の問題だ。その中にも、織田軍が発する鬨の声が響き渡る。もはや、一刻の猶予も無い。とにかく市の心を自分から離すために、浅井家の血筋を残すために、只ひたすらに、しかし、それなりに加減して市を蹴り続ける。ながらに、愛しているからこそ蹴り続ける。

「出て行け！ 魔王めと生き写しな面など見たくもないのじや！」

早々に出て行け！ 某の前から消え失せい！」

心にも無い言葉を吐き付けながら、とにかく蹴りを入れる。

漸く市が立ち上がり、頭を深々と下げて呴くように別れを告げる。

「浅井の血、絶対に絶やしませぬ……」「頭を上げた市の田にほ、涙が溢れていた。

市が脱出したのを見届けた後、長政は一際穏やかな表情で座し、脇差しを抜く。

織田軍が奥の間に殺到した時、既に長政は腹を割つて果てていた。それを発見した織田兵は首を灼つて焼け落ちる寸前の小谷城を脱出、長政の首は、無事信長の下に届けられた。

こうして、小谷城共々浅井長政はこの世から消え、浅井家は滅亡してしまったのだ。

終章 【魔王】

市は、脱出後再び信長の下へ帰っている。そこに居たのは、かつての面倒見の良い、人好きのする信長ではなかつた。

信長は、市に問う。

「何故長政は謀反を起こしたのじゃ……」

信長には、それが解らない。長政に對しては、殊の外氣を使つて礼を尽くしていたのである。

「長政殿は南近江を六角家からの降將に任せてしまつたことを、酷く怨んでおりました」

「説明はしたのであるうな。わしはそれを期待してお前を嫁にやつたのだぞ」

信長が常に側に置いておきたかつた市を敢えて嫁に出したのは、信長の考えを長政に【正確に】伝えてもらうためなのだ。
「勿論でござります。わたしはしかと【家臣でない者】に所領は分配できぬ故です」とお伝え致しました

期待した通りの説明だ。だが、何かが抜けているような気がする。
「南近江、わしが天下を治めた時に長政に任せそうとしてあることは、話してくれたか?」

「? 話さずとも悟つて下さると思つておりました故……」

市がどもり氣味に怖ず怖ずと答える。この信長の雰囲氣、間違いなく同じなのだ。

稻葉山城落城時の長政の雰囲氣と。

「つづけめが……」
「一言の下に市の頬を張る。

「越前攻めも根に持つていたであろう。あれについては何と申した」
長政は始めから一貫して自分達主体で朝倉を攻めたかつた筈だ。
だが、相手の出鼻を完全にくじくためには、電撃的な奇襲先生しか
ない。だからトドメだけ任せて自分主体で攻めて行ったのである。
「もつ、もつ、申し訳訣……、ございま……、せぬせぬぬぬ……」
震えてまともに喋ることも出来ない。この信長は、明らかに魔王
だ。

「それでは解らぬ。何が済まぬのか申して見よ」
「説明しようとはしたのですが……、そぶつ！」

言い訳が終わらないうちに、信長の拳が市の頬を捉える。殴り飛

ばされる市に信長は吐き捨てた。

「要するに、言いそびれたのだな、うつけめが」
そして、信長は続けた。

「この涙はこの第六天魔王最後の涙じゃ。余程長政を買っていたの
じゃな、この男は。じゃが、その想いを流し出すことによつて、そ
の精神は完全にわしの物となる」

『まさかまさか』

どうしても信じたくなかった。象徴的な物でしかなかつた筈の【
第六天魔王】が、長政の強い信心によつて、実在化していたとは。
そしてそれが、信頼する義弟を、討たなくてはならなくなつてしま
つた信長の沈んだ心に入り込んでしまつたとは。

乱世の魔王【第六天魔王】それは、決して信長が己の意志で化けたのではない。

信頼していた義兄に裏切られたと勘違いしてしまった義弟により作り出された、狂った時代の副産物なのである。

終

終章 【魔+】（後書き）

手に取つてくださいまして、誠にありがとうございました。

四章辺りからあからさまな創作を交え始めてしましたが、歴史的な流れはおそらくこんな感じかなと自分なりに自信を持って書いて書いたつもりです。

最後に朝倉家支持者の方、朝倉家ゆかりの方、戦中に書いたためあの様な扱いになつてしましましたが、これに関しては誠に申し訳ありません。

朝倉義景は政治家としてかなり優秀な方であることは解つてゐるだけに、自分でもこの扱いは酷すぎるとは思つてはいたのですが、構成上こいつをやるを得ませんでした。ご理解頂けると幸です。

ではでは、このような長い作品を最後までお読み下さいました
誠にありがとうございました

m — — m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7198e/>

新・浅井長政伝 ~戦国乱世に魔王を喚んだ男~

2010年10月9日23時21分発行